



童話を書く子どもたち

室 谷 幸 吉

子どもにユメをもたせることに不賛成人はおそらくあります。しかし、どんなユメをもたせるかとなると、考えがマチマチで、ちがってきます。

王様やおヒメさまがでてくる、花がダンスをしたり、金魚やスズメが、うたったりしゃべったりというロマンチックなユメを支持する人があります。

かと思うと、「いや、そんなロマンチックなユメは、一歩一歩よりよい生活を積みあげていこうという積極的な気迫をにぶらせ、失わせもする。現実を見ぬくきびしい目にオオイをかけたなり、くもらせたりしてはならない。」と強調してゆずらない。生の現実派もいます。

子どもたちは、実に話をきくことを喜びます。いわゆる「物語・おとぎ話・童話」といった類のものを……。生の現実派が、「逃避

的だ。遊戯的だ。」とのしる三ころの種類のものを、です。しかも、ただ聞いているだけに終始せず、ある傾向の子どもらは、実に熱心に、そうした種類の話を書きはじめます。もつとも私は、子どもらが入学して来てまもない四月の中旬から『星のこども』という手製の読みものを、一枚文集の形にして子どもらに手渡し、毎日のように家庭に持ち帰らせ、回覧させました。

その中に「おべんとうとねずみたち」とか「かたつむりの見たゆめ」といった先生の手になる童話風の作品も、読みものとしてしばしば載せました。こういうことが、子どもらの創作への目と意欲をひきたてたのだらうということは、十分想像されるわけです。

うまの子とたろうちゃん

あるあつい日のこと、うまの子が、たろうちゃんにつれられて、

もりのなかをあるいていきました。すると、とつぜん「うおー」というこえがしたので、いそいでにげていきました。うまの子のうまいことっていつたらありません。とらがきたら、じょうずににげる。とらがこちらにくると、むこうににげます。それを見たろうちゃんは、びっくりしました（一年生・五月もの）

といったものです。まもなく、「つゞき話」といった形で、ワラ半紙を二つに折り、まん中を糸とじにした雑誌風の自製本なども作りだしました。

たりないかるた

あるところにかるたがありました。そのかるたに、たりないじがありました。そのじは「と」というじと、「こ」というじと、「ほ」というじと、「し」というじと、「の」というじと、「も」というじです。そしてちがうかるたをかっても、いまいったじはありません。それでかるたをかうのは、あきらめました。かるたはもう十五かいぐらいかったので、おかねは百円ぼっちになりました。それで、あめを二十ぼんしか、かえなくなりしました。

ところが、おかねはいっぺんにふえて、千まん円、おくまん円となり、あめ二十ぼんどころか、いろんなものがかえるようになりました。かるたをかいなくなったので、かったら、たりないじはやっぱりありました。そのじは「の」と「る」と「は」と「ひ」です。どうしてかな、どうしてかなと、こころの中でいってしまし

た。

どんどんおかねはたまりました。おかねもちになりました。千円まん円ぐらいたまりました。こんどかったかるたは、たりなくないです。それはそれはおおよろこびをしました。

これはつゞき話風の作品です。

ぼうやといぬ

ある日、ぼうやは、おかあさまにつれられて町へいきました。そのうするといぬをうっていました。ぼうやは、それに目をとめて、

「いぬかって、かってよー よー。」といいました。おかあさんはしかたがないので、

「あとでね。かえるときよ。」

ぼうやは、ききません。

「かってよー。よー かって。」といって、きかないので、しょうがないので、そのいぬをかってしまいました。ぼうやは、よろこんで、いぬをつれてうちへかえりました。うちで、いぬといっしょに、よくあそびました。おかあさまが、

「ねえ、ぼうや。いぬをぶったり、いじめたらだめよ。」といいました。ぼうやは、

「はい。」とげんきにいました。

それから、よるになりました。ぼうやはいぬをだいに、げんかんのこやにいれてねました。あさがきたら、ぼうやはとびおきて、

いぬのところにいきました。いぬは、ちゃんとおきていました。ぼうやは、また一日、いぬといっしょにあそびました。ぼうやは、それから、いぬとばかりあそびました。

以上は、そのころの作品の一例です。「たりないかるた」では、この子の空想の方向やタイプなどがうかがわれますし、「ぼうやといぬ」は、生活童話風な作品で、現実を見るあたたかい目や倫理感などにふれることができます。

ふしぎな山

あるところに、ふしぎな山がありました。うんとべんきょうして、このころのとてもいい人が、この山へのぼると、あめや、いろんなものが木になったり、おかしがはっばになってさいています。わるい人がのぼると、とらがきて、てんとむしノミや、はっばのゆうれいなどがでる、ふしぎな山です。みなさんがこのおはなしをきくと、ゆめだろうとおもうかもしれません、ちょっとこのおはなしをきいてごらん下さい。

あるとき、おじいさんが、やつとてつぺんにのぼったとき、ばばーん、ばばーんと、すごいおとがきこえました。さっそく、そこらを見ると、ふんかで、あちこちばんばんいっているの、おどろいてにげる。そしてその山は、うんどうじょうじょうになりました。みなさん、どうでしょう。

〈B 六才六ヶ月作品〉

子どもらの「作り話」は、このように「あるところに」と書き出されることが多いようでした。「むかしむかし」という、過去感覚からの発想は、どうもオトナの専売品で、子どもの心の世界のものではないように思われます。で、私は、この時期の子どもらの童話的産物を『あるところになし』と名づけたものでした。

たまたま、ある子どもが書き届けてくれた童話風作品を、ガリ版にしておおぜいの子どもに渡し、国話の時間に、その読みや、内容についてふれること、それがよい刺激となり、子どもらの記述活動が目みえて活発になるのでした。

ところがみると、このように活発な表現活動は、クラスの子ども全体に、一ように認められるのではなく、ある特別な子供たちに、比較的片寄って見られるのでした。

空想型とでも言えるタイプの子の群があつて、そういう傾向の子の手で、とりわけ多くの作品がもちこまれます。一方では、空想的作品にはとりたてて意向を示さず、相変らずコツコツと、「きょうはこれこれのことをした」式の、経験・行動の記述一本やりの姿勢で、おし通す「生活派」児童もありました。こういう点に、個性や性格のにじんだ興味の方向がうかがえて、おもしろいことでした。ある日、Cが「はる子さんのおつかい」という生活劇風な文をいかけてきました。私は早速ガリ版におこして、つぎの日扱いました。このはじめての劇的な文表現がきっかけとなり、Dが追っかけて書いてきたのが――

おともだち

★でる人——おかあさん。ゆり子。きょう子

★ところ——そと

(ゆり子、そとであそんでいる。)

きょう子。 ゆり子ちゃん。 いいものあげるからおいでよ。

ゆり子。 いいものつて、なかに。

きょう子。 ぬりえよ。

ゆり子。 そんなもの、おうちにたくさんあるわ。 いらぬわ。

きょう子。 いらぬなら、いいわ。 そのかわりあそんであげない

わ。

ゆり子。 あそんでくれなくてもいいわ。

おかあさん。 ゆり子、はやくいらっしやい。 おやつをあげますか

ら。

(ゆり子、はしってかえる。)

おかあさん。 おやつ、おいしいでしょう。

ゆり子。 ええ、とてもおいしいわ。

おかあさん。 おやつをたべたら、おべんきょうしなさいね。

ゆり子。 もうすこし、あそんでからでいいでしょう。

おかあさん。 あなたはさつきからあそびどうでしょう。

ゆり子。 じゃあするわ。 すこしでいいでしょう。

おかあさん。 いいわ。

(ゆり子、つくえにむかってさんすうをはじめ。しばらくたつて)

きょう子。 ゆり子ちゃん、あそびましよう。

ゆり子。 きょう子ちゃん、ちょっと、まってて。

ゆり子。 おかあさん、あそんでいていいでしょう。

おかあさん。 いまおべんきょうしたさんすうをみせてごらん。 ……

いいわ。 でもはやくかえっていらっしやい。

(ゆり子ときょう子 そとにでてくる。)

△六歳十一月作品▽

この労作が、新しい意欲への火つけ役となり、後をおっかけて幾人もの子供たちから同じ劇形式による『こどもげき』がもちこまれてきました。

新しいものに取り組み、それを消化していこうという意向の強さには、幾たびも目を見はられました。 模倣の強い子どもたちです。 それだけに、望ましい刺激を整理して与えることの必要さと、そうした営みの効果的であることを、はつきりと悟ったのでした。 どの子の場合でも、このような作話活動は、比較的短い、単純な話からスタートします。

神さまとわたくし

天の神さまに、私のおどりを、おめにかけたいので、天からおうちをのべらんだまできてね。

わたしはおにかいで、おどりのおけいこをしているから見にきてね。

それから木よう日は、ほんとの会なのよ。だからおべんともってきてちょうだい。

私は「こんこん小雪」っていうおどりをするのよ。それはごにおどる人もあるわよ。わたしは夜におどるのよ。

神さま さようなら。またあしたね。

△E。六歳八ヶ月作品△

神さま相手に、呼びかけ話しかけるといった形のお話も生まれてきます。こうして表現の形も、書く内容も多彩になってきます。

——父親が、借金に追い回され、身を粉にして働いているんじゃないか。なんぼ子どもとはいえ、なんというわずった甘いユメを見ているんだ。こんな自タラクなゼイタク・ムダはゆるされない。

しかし、だからといって、人間の『真実』の所在を、人間相互の対立や、闘争や抵抗といった激しい動きの中だけに求めるという考え方には、私はわかに賛成しかねます。オトナとしてもそうです。とりわけ子どもらを、そういう思考や行動の場面にさそいこみ、閉じこんでしまうことに、多くの疑問をいだきます。

しかし、童話的な虚構の色濃い現実の解釈や思考が、現実のふくんでいる最も解決を必要とする根底的な問題を、往々にして見のがし、感覚的な皮相的な浅い処理の仕方、おもしろおかしく通過

△擦過△してしまふ危険に陥りやすいことは、たしかに注意されねばならないことです。

そうした注意や戒心をしながらも、なお童話的な解釈や潤色や思考が、これまたいつわりのない真実な精神の一断面 一風景であることを忘れたくないものです。

童話の中で行われる人物の解釈や行動の設定など、それらはすべて作者の、個性の投影であり、願望の表出であると私は思います。

今日の子どもの多くは、詩を失っております。『美』に驚く心のキハクさには驚くほかありません。これは、やはり一つの人間的な欠陥と見るべきではないでしょうか。しかし生活から遊離した「美」なり「詩」なりは、しょせんは根のない浮き草にすぎません。

勤労の中の『詩』生産の中の『美』——これこそますます発掘されねばならないものです。人間と人間とを結ぶ広い行動のかかわりあいの中から「美」や「詩」が掘りだされることを望みます。

あまだれ

あめがおとをたてないで

さびしそうにふっているの

うたをうたってやった

あまだれが

一つおちたら

うたのつづきをわすれた

つぎのあまだれ

まだかいな

〈F〉

目

わたしのめは

いい めだなあ——

めのふたをすると

めの中が くらくなる。

わたしは

ひとりぼっちになる。

めをあけると

ひるのくにになる。

〈G〉

とんぼ

おぼん近くになると 母は

「とんぼをつかまえてはいけない。」と言う。

「とんぼは

ほとけさまをつれてくるからね。」

どのとんぼが

うちの父をつれてくるのだろう。

涼しい野花に 一つ

とまっている

とんぼを見るとなつかしい。

〈H〉

といった心の動きから、人間としての純粹な感情や思考が、いよ深く美しくみがかれてゆくことを信じます。

こうしたコトバにとらえられる心の動きは、実にきびしい「生の炎」といったものです。高まり深まった生活から、泉のようにぶきあがる情感のかがやきとでもいった美しさです。あたたかいなぐさめをしずめた楽しさです。ケンカごしで、かみつくように叫びあげるギスギスした大声ではありません。

幸福——そうです、ほんとうの幸福は、道端の雑草にまじり、そのかげにひそかにさく野の花のような、こうした創作活動の中にも（中にだけではありません）あるのではないでしょう。とらわれず、ゆがまぬ広くゆたかな「生活」の見方から、子供のユメを、正しく・美しく・強く育てるために、子どもたちの心から動きだす「お話作り」の勉強を、のびのびと開放しておいてやっていいのではないか、と思うのですが、どうでしょう。

動植物に仮託して、自分の語りたい意味を述べるという表現上の間接的手法が、子どもの場合、どの程度に可能なものであるか、とか、そういう表現をゆるすことが、教育上どんな意義をもつものか、など、表現機制にまつわる重要で微妙な問題がいくつかりますが、それらについての考えは、他の機会に述べることにしました。

（明星学園教諭）